

国際平和ミュージアムの歩みにふれて

安齋 育郎

こんにちは、名誉館長の安齋育郎です。

私も今期リニューアルにそれなりに関わりましたが、私のほうからはむしろ、ここ30年、立命館の国際平和ミュージアムがどんな歩みを刻んできたかということを中心に手短にお話をしたいと思います。

私自身は東大の工学部を出て同大学医学部で働き、立命館の経済学部に来た上で、国際関係学部に移籍したというちょっと変わり者なので、多様な分野に関わってきた研究者として、このミュージアムはと

でも魅力的な仕事で、それなりに奮闘してきました。

最初に、国際平和ミュージアムが平和というのをどんなものだと考えているかということでもちょっとスライドをお見せしますが、「この世は不思議な世の中だ!」と書いてあるんですが、左のように太り過ぎて困っている人がたくさんいるかと思うと、右のようにアフリカの子どもがもう息も絶え絶え、その後ろにハゲワシが死ぬのを待っているという、こういう状況がともにあるわけですね。飢え死にする人の数はよく分からないんですけども、1年間に500万人から1,500万人と言われていて、約1,000万人だとすると、一番下にあるように、3秒に1人の割合で飢え死にしているわけですね。

我々の生活を見ると、日本人が2019年に1年間に廃棄した食料（食べられるのに廃棄した、いわゆる「食品ロス」）が600万トン余りあるのに、世界の食糧援助は全部足し合わせても300万トンちょっとということで、日本で捨てられている食糧のほうが多いというわけですね。消費者庁によれば、2021年のデータでは廃棄食糧が523万トン、食糧援助が420万トンですが、この時点でも食糧援助の約1.2倍が廃棄されています。

アメリカなどに目を向けると、銃乱射事件というのがあって、実に恐ろしいことに、アメリカは独立戦争の時代から今日までの間に戦争で死んだ人の数と、国内で銃で死んだ人の数を比べると、国内で銃で死んだ人の数のほうがずっと多いんですね。こういうふうに戦争がなければ平和というわけにもいかないということですね。

一方、今、地球温暖化問題が議論されていますけれども、これも人間の平和な生存に関わる重大な構造的な問題として浮かび上がっているわけですね。

現代平和学では、平和というのは、「戦争のないこと」ではなく、「暴力のないこと」だというふうに理解されていて、その場合の「暴力」というのは、人間の能力が100%発揮されるのを阻んでいる原因のことを暴力と呼んでいて、飢餓とか、貧困とか、社会的差別とか、人権抑圧とか、環境破壊とか、医療や教育や福祉の遅れ、そういうものは全て人間能力がフルに発揮されるのを阻んでいる原因として、

これを克服しなければいけないと考えられており、立命館も平和の問題をかなり広く捉えています。

しかし、やっぱり戦争やその手段としての大量破壊兵器というのは最大の暴力だということで、ミュージアムはこの戦争の問題については、とりわけ一つの力点を置いてこれまでも展示し、今度のリニューアルでもその点について力を注いだところで

す。日本でも、過去に戦争でたくさんの人が命を失っているわけですね。東京大空襲（1945年3月10日）では一晩で10万から12万の人が亡くなった。その直後の沖縄戦（1945年3月26日～6月23日）では県民4人に1人、合計20万人ぐらいが命を失った。そしてその後、8月6日には広島にウラン原爆が、その3日後の8月9日には長崎にプルトニウム原爆が投下されて、30万人以上の命が失われたということで、戦争は非常に大きな暴力であることは明白です。

厄介なことに、ここ京都も原爆投下の目標だったのですが、1945年5月8日・9日にナチス・ドイツが敗れたその翌日の5月10日・11日には、もうアメリカで原爆を日本のどこに落とすかという選定委員会が開かれて、その段階ではここ京都は第1目標でした。その狙い目は、京都駅の西1キロにあった梅小路蒸気機関車区の円形倉庫（列車の向きを変えるときに回転テーブル）で、それが原爆を投下する1万メートル上空からもよく見えるというんですね。京都盆地のど真ん中です。もしもここに原爆が投下されていたら、恐らく50万人ぐらいの人々が亡くなったのではないかと推定しています。

やはり戦争になるとたくさんの命が奪われますし、人々が自分がやりたいと思っていたことを人生半ばにして止めなければならない。戦争政策の下では大学など科学者・研究者も敵を殺戮するための兵器研究に駆り出され、毒ガスとか、細菌兵器とか、原爆を造ることに動員されますし、学生たちもペンを銃に持ち替えて戦場に送られることになるんですね。

立命館大学も約3,000人の学生を戦場に送り、およそ1,000人の命が失われたことになっています。もちろん、これは立命館だけではなくて、当時の大

学は学徒出陣ということで動員されましたけれども、立命館は戦後、末川博総長のイニシアチブの下で反省を加え、「平和と民主主義」の教学理念というのを確立して、戦後の新たな平和への歩みを刻んでいきました。

写真は彫刻家の本郷新さんが作った「わだつみ像」。戦没学生を象徴する像ですけれども、これを立命館に迎え入れて、現在は国際平和ミュージアムに設置されていますが、毎年12月8日前後に「わだつみ像」前集会、不戦のつどいというのを開き、理事長から総長から教員から大学院生から学生から、そして生協で働く職員の代表なども含めて、ここで毎年「不戦への誓い」を新たにしているんですね。

そういう学風の中で1992年に国際平和ミュージアムが開設されたのですが、これは「平和のための京都の戦争展」運動という市民たちが1981年から続けていた平和運動を一つの母体にして、立命館との協働の下で生まれたミュージアムであります。

このミュージアムは1992年に世界初の大学立の総合的な平和博物館として誕生しましたが、開設に当たっては雀部晶経営学部教授などが大いに奮闘したんですね。初代館長には、評論家の加藤周一さん（国際関係学部客員教授）に就任していただいて、「Kyoto Museum for World Peace」ということで、世界にその存在をアピールしてきたんですね。

ミュージアムは1994年に広島平和記念資料館と協力して「日本平和博物館会議」の立ち上げに参画し、今も構成員である比較的大きな平和博物館10館（沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、対馬丸記念館、長崎原爆資料館、広島平和記念館、ピースおおさか、立命館大学国際平和ミュージアム、地球市民かながわプラザ、川崎市平和館、埼玉県平和資料館）で毎年研修や相互の活動紹介や協議事項の審議などを行っています。

そして、2005年に、先ほど市井先生からお話があったように、第1次リニューアルがあり、故・岡田英樹文学部教授が大いに奮闘されました。

そして今、私たちが迎えているのは第2次リニューアルということで9月23日に正式にオープンする予定で、市井先生をはじめみんなが奮闘して

いるということです。

このミュージアムは研究活動も取り組んできており、『立命館平和研究』という研究誌第1号が2000年に発行され、それは体裁を変えて今も発行され続け、いろいろな平和研究や平和教育研究の成果を反映しています。

同時に、立命館は他の平和博物館とも協力する取り組みも行っており、ノルウェーのノーベル平和センターに原爆関係の資料を貸し出したり、他の平和博物館と協力して特別展を開催したりしています。また、『国際平和ミュージアムだより』という媒体も定期的に発行して、人々にミュージアムが取り組んでいる内容を伝えています。

さらに、長野県の上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」とも縁組を結んで、立命館のミュージアムの中に「無言館京都館—いのちの画室（アトリエ）」という展示室を設けており、窪島誠一郎館長とも手を携えて今後とも協力関係を発展させたいと考えています。

そして、ミュージアムは国際的にも活動を進めてきたので、1998年、2008年、2020年とほぼ10年に一度の割合で国際平和博物館会議、世界中から平和博物館関係者の参加を得て経験交流や知識・情報の交流をする会議を開いてきました。そこでは、その時々館長、高杉巴彦館長や吾郷眞一館長、そして副館長の山根和代先生や藤岡惇先生などにも大いに奮闘してもらいました。

1998年の第3回の会議の中では、「平和のための博物館市民ネットワーク」という日本の平和博物館関係者が加盟するネットワークが形成されましたが、同ネットワークは日英両文のニューズレター『ミューズ（Muse）』を年4回発行し、世界的にもとても喜ばれているところです。

2020年9月には第10回国際平和博物館会議を開く予定でしたが、コロナに見舞われたためにオンラインで開催し、歴史的な大成功を収めたとして国際的にも評価されています。この国際平和博物館会議の主催者は、「平和のための博物館国際ネットワーク（International Network of Museums for Peace, INMP）」ですが、この大会を開いた時期に

は私とそのゼネラル・コーディネーターを務めていました。

立命館大学国際平和ミュージアムは、「見て、感じて、考えて、その一歩を踏みだそう」というモットーを掲げていますが、今度のリニューアルがモットーを実現する上でどのような成果として現れるのか、楽しみにしています。博物館ではガイドが大事な役割を果たしますが、ずっとガイドを担当してきた「平和友の会」の人々とも意見を交流しながら、平和教育の拠点としての役割を一層活性化していきたいものだと思います。

それと同時に、また国内外の国際平和博物館とも手を携えて、世界全体の平和博物館のネットワークを強めるために立命館も協力、貢献していきたいと思っています。

以上で私の報告を終わります。ありがとうございました。